

北宋建国期における都開封の山水画

前田, 佳那

<https://hdl.handle.net/2324/7363542>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名	前田 佳那			
論 文 名	北宋建国期における都開封の山水画			
論文調査委員	主 査	九州大学	教 授	井手 誠之輔
	副 査	九州大学	准教授	伊藤 拓真
	副 査	九州大学	講 師	楊 昱
	副 査	京都市立芸術大学	教 授	竹浪 遠

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、北宋前期の時代相を三代の皇帝による建国期として捉え、都開封における造営事業と関係して展開した山水画を考察の対象とする。

序章では、従来の学説が、北宋中後期以降の文人士大夫たちの見方から言説化された画史の枠組みに縛られていることを問題視し、北宋前期の時代相に即して、制作にあたった画家のみならず、支援者や鑑賞者、所蔵者らを含めた人々の動きを視野にいれ、建国期の都開封という場における多様なコンテキストの中で山水画が担った意味や機能を考察する本論文の構想を提示する。

第一章では、南唐出身の僧巨然が、北宋の都開封の政治中枢におかれた翰林学士院の山水壁画制作に抜擢された背景を解明する。とくに蘇易簡や徐鉉といった蜀や南唐出身の有力者の人脈を掘り起こし、巨然の「廬山図」「皖口山図」といった仏教や道教信仰と関連する主題に注目し、建国期における各地の聖山や地理イメージの集積の観点からも巨然画が意義を有していたことへの見通しを示している。

第二章では、燕文貴をはじめとする屋木画家に注目し、建築、船、盤車、水磨などの物流や新しい動力源をあらわす屋木は、宋代の技術革新や社会システムを象徴する新モチーフとして大規模な造営事業を行う為政者や高官たちに重視され、建国期の理念が反映された実利的なイメージとして機能したとする新解釈を示している。

第三章では、「小様」（下図や図面、建物の小型の試作模型の総称）をキーワードとして屋木画家の活動を掘り下げ、単に建築物を描くだけでなく、造営する建物の構想図を担当し、「小様」から構造の検討をも行うなど建築事業そのものにも関与していた事例を見出し、建国期の屋木画が合理的で緻密かつ高度な再現性を具えるに至った要因を提示した。また「小様」を用いることで得られた視界が、大画面の山水画の制作にも大きな革新を準備したことを指摘している。

第四章では、燕文貴の現存作品「江山楼観図巻」（大阪市立美術館）に総合的な検討を加え、樹石描写に李成画の受容を、山岳表現に同時代の范寛ではなく先行する荆浩・関同等の華北系山水画の受容や南唐の巨然に由来する山容の受容を確認し、複数の地域の景観の摂取と並列が意図されていることを指摘し、この種の総合がなされた要因として、全国から画家や作品が都開封に集積され、地理や様々な文物のイメージも取り込んだ新たな王朝のための絵画が、建国期の為政者たちによって要請されるという時代背景があったとする。

終章では、燕文貴の画風が継承されながらも北宋後期に文人士大夫が形成した絵画観から疎外された理由を、燕文貴の職業画家としての属性と画風の特徴をなす細緻な描写に求め、翻って北宋建国期の巨然、屋木画家、燕文貴らの画業は、彼らの制作の背後にいた芸術事業を担っていた蜀や南唐、呉越といった亡国の遺臣たちの立場、パトロネージ、人脈、そして都開封における宗教政策や技術革新などの時代の機運に注目してこそ、本来的な理解が可能となると結論づけている。

以上、本論文における新知見と提言は、北宋前期はもとより、宋時代全体の絵画史についても、今後より詳細で時代状況に即した理解が得られるのではないかという期待や示唆を与えるものとして高く評価に値する。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに十分な能力を持つことを認める。